

3-(5) 事業報告書

1. 平成 24 年度法人の概要

設置する大学の組織(平成 24 年 5 月 1 日現在)

設置者 学校法人東北芸術工科大学

所在地 山形市上桜田 3 丁目 4 番 5 号

設置する大学 東北芸術工科大学

■設置する大学の概要

平成 24 年 5 月 1 日現在 (人)

		入学定員	収容定員
芸術学部	美術史・文化財保存修復学科	20	80
	歴史遺産学科	24	96
	美術科	142	543
	文芸学科	35	35
デザイン工学部	プロダクトデザイン学科	60	230
	建築・環境デザイン学科	55	215
	グラフィックデザイン学科	55	165
	映像学科	50	150
	企画構想学科	40	120
	情報デザイン学科	-	55
	メディア・コンテンツデザイン学科	-	75
学部合計		481	1,764
大学院	芸術工学研究科(博士課程)	5	15
	芸術工学研究科(修士課程)	25	50
大学院合計		30	65
総計		511	1,829

■教職員概要(平成 24 年 5 月 1 日現在)

教員	106 名
職員	100 名

■在學生数(平成24年5月1日現在)

芸術学部	1,000名
デザイン工学部	1,238名
芸術工学研究科	104名
合計	2,342名

■役員(平成24年5月1日) 理事17名／監事3名

理事長 徳山詳直

副理事長 古澤茂堂

常務理事 坂元 徹

常務理事 五十嵐眞二

常務理事 野村眞司

常務理事 高久正史

理事 根岸吉太郎

理事 白杉悦雄

理事 木原正徳

理事 片上義則

理事 北村誠

理事 熊谷眞一

理事 高山克英

理事 寺脇研

理事 徳山豊

理事 細谷伸夫

理事 本間利雄

常任監事 清宮久子

監事 遠藤栄次郎

監事 長谷川吉茂

2. 平成 24 年度事業実績

1) 教育改革への取り組み

平成 24 年度は、平成 21 年度に開設した新学科・コース体制による卒業生を初めて社会に輩出するとともに、次の改革に向けた準備に全学的な取り組みを実施した年となりました。

現在の社会環境は、成熟化、少子高齢化、情報化、グローバル化といった言葉に象徴されるように、将来の予測が非常に困難な時代を迎えています。本学では、この先行きが不透明な時代に生き抜く力として求められるのは、新しい発想力や創造力であり、芸術・デザインを学ぶ者にこそその優位性が備わるという認識のもと、本学で育成すべき人材像を全学で改めて共有し、ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)として定めることから始めました。

次に、本学で身につけるべき「4つの力」と「10 の能力要素」を明確化し、各学科の授業科目との対応関係について表で明確化することにより、現状のカリキュラムと本来必要な授業科目との整合性について点検を実施し、平成 25 年度からの新しいカリキュラム設計に反映させることができました。

またあわせて、新しく開発したカリキュラムを実施する教員の資質向上を図るため、新カリキュラム、コーチング、成績評価基準などをテーマとした研修・ワークショップを計 4 回実施するなど、教授法の改善・研修(FD)活動に全学的に取り組みました。

2) 学生募集状況について

平成 25 年度入学者にかかる総志願者数は 2,278 人となりました。前年度と比較し、志願者は 159 名(昨年比 6.5%)の減少となりました。今後、より広い層のからの志願者を確保していくために、平成 26 年度入試に向けてより受験しやすい入試制度の導入など各種改革を実施するとともに、「コミュニティデザイン学科」の設置など、魅力ある教育展開に向けての学科再編等に取り組んでいきます。

3) 就職状況について

平成 24 年度の学部卒業生 474 名の進路は、就職希望者 339 名中、就職者が 282 名(内定率 83.2%)、進学者は 60 名でした。大変厳しい状況の中、就職内定率は前回よりも 3.9 ポイント向上しました。今回の就職内定率の向上は、これまでも比較的安定した就職内定率を保っていたデザイン工学部に加え、芸術学部の内定率が大幅に向上したことが起因しています。

また、今後さらなる進路実績の向上を図るため、平成 25 年 2 月 1 日に「キャリアセンター」を新たに設置し、3 名の常駐スタッフが教員と連携しながら進路サポートを強力に推進していきます。

4) こども芸術大学

3 歳から小学校入学前の子どもとお母さんのための、幼稚園と並ぶ教育機関として活動しているこども芸術大学では、平成 24 年度当初 19 組の親子を新入生として迎え、合計 42 組で新た

な学年を迎えました。

こども芸術大学では子どもたち中心の日々の保育活動に加え、毎週水曜日にお母さんも登校する日を設定し、様々な子どもの姿を知るための活動を実施しました。「母と子の時間」(計 8 回開催)では、親子で一緒に季節の行事や創作活動を経験し、「どんぐりたいむ」(計 6 回開催)では、子どもたちが普段のどおり遊んでいる中にお母さんも加わり一緒に遊ぶことにより、子ども目線での気付きやわが子以外の子どもたちとの交流も経験します。また、「母親講座」(計 14 回開催)では、お母さんたちの内面性が育ち、家族、社会、世界とのつながりを感じられるような座学形式やワークショップ形式の講座を開講し、日々の子育てへの刺激やヒントを提供するとともに、母親同志の交流や自身の成長を実感する機会となっています。

5) 外苑キャンパス

姉妹校の京都造形芸術大学と共同で運営している東京・外苑キャンパスでは、平成 24 年 10 月から 1 月にかけて「日本の美術教育を考える」をテーマに連続シンポジウムを 4 回開催しました。シンポジウムには総計 401 名の来場者を迎えたとともに、インターネットの動画配信を行っており、これまでに 3,700 名(平成 25 年 5 月現在)を超える方々から視聴いただいております。また、東京及び周辺地域の社会人を主な対象とした講座「企画構想学舎」は計 141 名が受講し、京都造形芸術大学と共同企画する「東京藝術学舎」は、多数の本学教員も講師として登壇し、平成 24 年度では延べ約 2,800 名が受講しました。

平成 24 年 10 月には、京都造形芸術大との共同事業として外苑キャンパスに「芸術学舎出版」を設立し、大学の出版部機能や一般書の刊行を行なっていく予定です。

6) 全国高等学校デザイン選手権大会

高校生の視点で、社会や暮らしのなかから問題・課題を見つけ、その解決方法を分かりやすく提案する「デザセン」は、平成 24 年度で第 19 回目を迎え、過去最多の 934 チームからの応募を集めました。本学で開催した決勝大会では約 400 人の来場者に加え、ネット動画配信サイト「ニコニコ生放送」による中継で 5 万人以上が視聴しました。

また、平成 24 年度には、これまでの大会で発表されたデザイン提案の具現化が続き、4 つの提案が「デザセン発のデザイン」として実現されました。

【ネガポ辞典】 平成 22 年度大会で 3 位入賞した札幌平岸高等学校チームが提案した、後ろ向きの言葉を前向きな表現に変換する辞典が、平成 23 年 3 月の iPhone 用アプリ化に引き続き、平成 24 年 10 月に主婦の友社より出版された。

【まくら投げのすすめ】 平成 22 年度大会で準優勝した伊東高等学校城ヶ崎分校チームが提案した、まくら投げによる現代社会のストレス発散が、平成 25 年 2 月に地元温泉地の地域興しイベントとして開催された。

【つづきがないない】 平成 23 年度大会で入賞した臼田高等学校チームが提案した、物語のつづきや終わりを白紙にすることで子どもの発想力を育む絵本が、平成 25 年 3 月に地元の出版社から書籍化された。

【レシート日記】 平成 24 年度大会で優勝した伊東高等学校城ヶ崎分校チームが提案した、レ

シートに罫線をつけてメモや思い出を記録するアイデアが、大手文具メーカーから商品化に向けて動き出した。

7) 附置研究所及び産学連携活動

【共創デザイン室】

毎年、県内外の企業や行政等から 100 件を超える委託研究やデザイン業務等の相談を受けており、平成24年度は、34 件 21,997 千円の受託契約を締結しました。

また、平成 24 年度には、山形県工業技術センター及び特定非営利活動法人山形デザインネットワークと本学との三者で「やまがたデザイン相談窓口 D-Link」を創設。3つの機関が連携を強化し、それぞれの強みを活かして県内企業のデザインに関する様々な相談を受け、支援する体制の充実が図られました。

【東北文化研究センター】

今年度より、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」が採択され、当研究センターの過去 10 年間にわたる研究の蓄積を土台に、現代のグローバル化社会にも対応しうる次世代型地域社会モデルを提示することを目的に研究を開始しました(平成 28 年度まで)。

また、過去の災害によって得られた教訓を生かし、災害に強い社会の構築を目指すための研究の一環として、東北大学との協定に基づき、共同研究「大規模災害における民俗知の援用に関する実践的研究」に取り組み始めました(平成 25 年度まで)。

自主研究と出版事業の一環としては、これまで発行してきた雑誌「季刊東北学」をリニューアルし、新「東北学」を創刊しました。

また、水上能楽堂「伝統館」運営事業においては、恒例となった「薪能」及び「THE 猿まわし」をはじめ、東インド古典舞踊の「オリッシーダンス公演」等を主催し、学内外から多くの参加者を集め、地域の芸術文化の向上に貢献しました。

【文化財保存修復研究センター】

東北に遺る文化財を保存・継承し、蓄積された知と技を世界へ発信することを目指す当センターでは、絵画・彫刻・仏像など地域の文化財の保存修復活動を展開しています。平成 24 年度には 23 件、7,568 千円の保存修復業務を受託しました。

また、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」(平成 22 年度～平成 26 年度)を実践しており、研究事業の 3 年目となる本年度は、研究期間 5 年間の中間年度に位置するため、主要な研究対象地域である西川町、大江町、高島町において複合的に取り組んできた研究をまとめ、3 年間の研究成果を各研究員らによって報告する研究調査報告会を開催しました。

平成 25 年 3 月には、東日本大震災で被災した文化財のレスキュー活動に対し、文化庁長官からの感謝状授与が行われました。

8) 文明哲学研究所の設立について

良心と健やかな芸術的創造性に根ざした、真に平和で幸福な文明哲学的価値観養成のための研究活動及び核廃絶と世界平和に向けた活動を展開するため、平成24年10月27日に姉妹校である京都造形芸術大学と共同で文明哲学研究所を設立しました。

核廃絶にむけた道筋を芸術的観点から見出すことを目的に、4つの研究と専門家会議を設け、文明哲学論を掘り下げています。研究所は京都造形芸術大学内に本拠を置き、東京、山形を結んだ活動を計画中であり、運営スタッフは、月刊誌「MOKU」の主筆である井原甲二氏を所長として迎え、副所長と事務スタッフ2名、合わせて4名体制でスタートしました。

【研究体系】

「核廃絶と世界平和」「地球環境問題」「宇宙及び生命(宇宙誌・生命誌)」「比較文明文化(人類史・文明史)」「藝術立国構想」

9) 東北復興支援事業について

平成23年度に引き続き、東日本大震災の復興支援事業として、現地でのボランティア活動、被災地に住む方々や、山形県に避難されている方々を対象とした各種ワークショップ等を実施しました。

ボランティア活動は、2年目の活動として平成25年1月26日までに延べ9回、410名が参加し、平成23年度からの2年間累計では延べ47回の活動に1,871名が参加しました。また、この活動を記録した書籍「ぼくらのスマイルエンジン」が出版されました。

芸術・デザインを活用した取り組みとしては、福島から山形へ転入されている家族を対象として、日帰りピクニック形式のワークショップを開催し、延べ215名の参加がありました。また、夏休みを利用し、南相馬市から小・中学生とその家族13組46名を招待し、学生・教員と共に演劇を制作するというプログラムのワークショップを行いました。

今後とも、東北に存在する芸術・デザイン系大学として何ができるかについて問いかけながら、復興支援事業を継続していく予定です。

10) 美術館大学センター

キャンパス全域を、周辺の景観や里山文化をも包括した「オープン・エア・ミュージアム」として地域に開いていくことを目指し、学内の研究機関等と共同で〈東北〉の風土に根ざした展覧会や、他地域とのネットワーク構築のためのシンポジウムを定期的に企画・開催しています。

平成24年度は、石川直樹写真展『異人 the stranger』と『TUAD mixing! 2012』の2つの展覧会・イベントを開催し、前者は2,248名の来場、後者は関連イベント含め延べ2,900名の参加となりました。

また、地域連携企画事業としては「ひじおりの灯2012」及び「荒井良二の山形じゃあにいい2012」を開催しました。6年目を迎えた「ひじおりの灯」は、山形県肘折温泉の夏の風物詩として一層定着するとともに、「山形じゃあにいい」は山形市中心部の施設「山形まなび館」を中心に展開したこともあり、関連イベント含め、10,074名の来場者を記録しました。

さらに、山形市内で隔年開催される「アフィニス夏の音楽祭」において「アートプロジェクト『煌

めき』を企画・実施し、主要会場にアート作品で彩りを添えました。

11) 社会人教育

生涯学習プログラム「+αrt(プラス・アート)」では、作品制作(絵画、版画、陶芸、漆芸など)や和太鼓の夜間・週末講座、臨床美術士養成講座や省エネ建築診断士養成講座の資格取得講座など、全26講座を開講し、延べ393名の方々より受講いただきました。

平成25年3月には生涯学習プログラム受講者による作品展「+αrt 2012 展」を本館7階ギャラリーで開催し、555名の来場となりました。

3. 教育

1) 学部

平成 24 年度は、平成 21 年度に開設した新学科、新カリキュラムの 4 年目として更なる教育内容の充実に向けて全学的に取り組んできました。

デザイン工学部は、グラフィックデザイン学科、映像学科及び企画構想学科の学科が開設 4 年目を迎えるとともに、学部全体で 320 名が入学しました。芸術学部では美術科の「工芸」及び「洋画」コースからそれぞれ独立した「テキスタイル」コース及び「版画」コース並びに芸術活動を通して人々の生活を豊かなものとしていくことを目指して設置した「総合美術」コースがいずれも開設 4 年目となるとともに、学部全体で 275 名が入学しました。

また、カリキュラムの改革を主導する教養教育センターも発足 4 年目となり、初年次少人数ゼミ科目である「教養ゼミナール」の更なる改革のため、「農芸体験」を取り入れたクラスと各種造形活動をグループで行うワークショップクラスの 2 系統の新カリキュラムの定着化と課題整理を行い、新入生の学びに主体性を持たせること及び身体知を取り戻すことに成果を得ることができました。

一方、これまで独立していた学生支援、教務、就職支援の 3 部門を「教学事務室」という 1 つの部門に統合して 4 年目をむかえ、各学科に専任の事務局職員を配置する体制により、教職員の連携は円滑になり、進路・就職支援での一定の成果が認められるようになってきました。

就職をとりまく厳しい状況は今後も予断を許さないものと考えられることから、平成 25 年 2 月に設置された「キャリアセンター」及び学生を直接指導する教員との連携をさらに強化し、進路・就職指導体制の高度化を図っていきます。

2) 大学院

平成 24 年度は修士課程に 101 名、博士後期課程に 3 名、計 104 名が在籍しました。平成 25 年 3 月には、芸術文化専攻 37 名、デザイン工学専攻 14 名(うち仙台スクール 3 名)の計 51 名が修士号の学位を得ました。

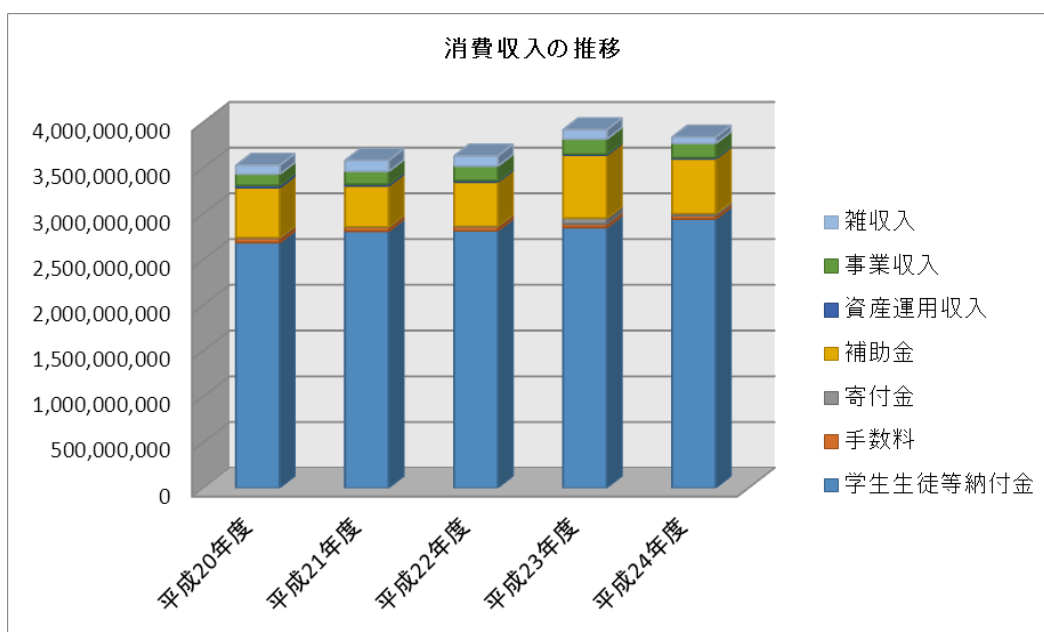
平成 25 年 4 月入学にかかる大学院の学生募集では、志願者数は芸術文化専攻 40 名、デザイン工学専攻 21 名(仙台スクール 8 名を含む)、計 61 名となり、選抜の結果 54 名が入学しました。

大学院を質・量ともに充実させていくため、平成 24 年度より本格的改革に取り組んでおり、まずはカリキュラム改革と授業改革に着手しました。今後、指導教員の教育活動の環境整備や大学院教育に関する点検・評価の PDCA サイクルの確立に取り組んでいきます。

4. 平成24年度 財務の概要

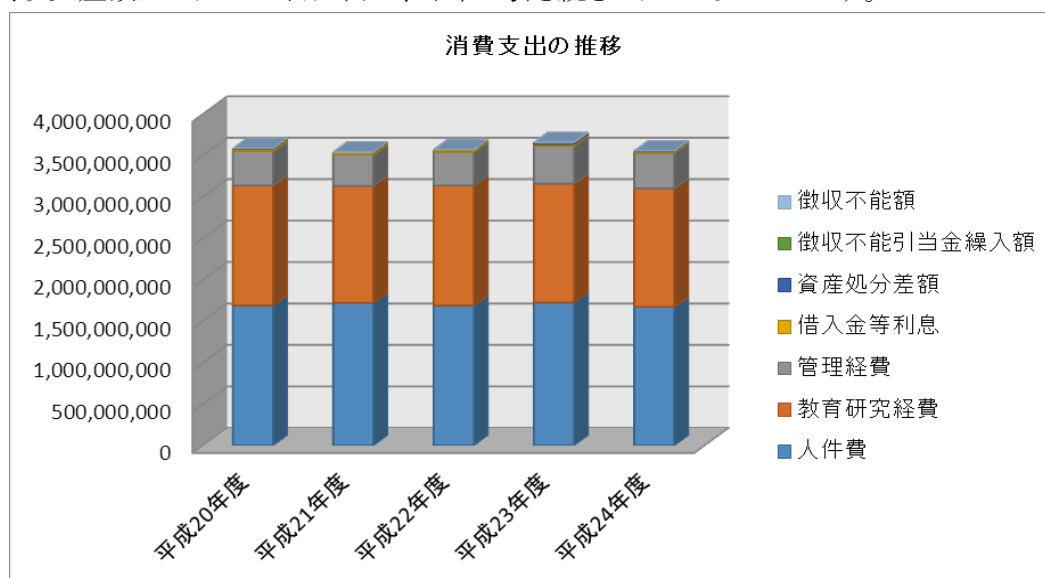
1) 概況

平成24年度決算では帰属収入が3,836百万円となり、昨年度の3,917百万円から81百万円の減少となりました。これは前年度耐震関係の補助金を獲得していたことによるものです。収入の主となる授業料収入は、入学者数が順調に推移しているため増加を続けており平成24年度は2,942百万円に達しています。



一方、消費支出は3,552百万円で、昨年度の3,655百万円から103百万円の減少となりました。これは主に予算執行の厳格化によるものです。

帰属収支差額はプラス284百万円で、昨年に引き続きプラスとなっています。



2) 資金収支計算書

収入の部、支出の部合計は予算額より167百万円減の5,070百万円となっています。

収入の部で前受け金収入が予算対比で減少していることが原因です。結果として、次年度繰越支払資金が予算額より8百万円減となっています。

支出の部では、東日本大震災の学費減免措置に係る奨学費支出が82百万円、耐震改修工事など施設関係支出が477百万となっておりますが、全学的に支出の抑制に取り組んだ結果、167百万円の減とすることができました。

3) 消費収支計算書

当年度消費支出超過額は予算に対して減少しています。これは消費支出が予算に比べて抑制できたことが原因です。

4) 貸借対照表

負債の部は長期借入金の返済が順調に進んでおります。平成20年度に導入したBEMS設備のリース未払金及び平成22年度に更新した教育用機器のリース未払いについても順調に支払いが進んでおり、前受金を除いた負債率13.0%と、昨年度より1.2ポイント減少しています。

資産の部は新実習棟の耐震改修工事、基幹ネットワークの更新などにより、固定資産が増加し、資産の部合計は昨年度より87百万円増加の15,805百万円となっています。